刊讀賣新聞　（第3種郵便物認可）

日本史アップデート

北朝の実像

ここに注目！

・南北朝時代の北朝の天皇は室町幕府に権力を奪われた「将軍の傀儡（かいらい）」と解釈されることが多かった。だが近年、北朝独自の制度の分析などで天皇と将軍の関係の見直しが進み、幕府と協調して政治を行った実態などが見えてきた。

・3代将軍足利義満が「王権簒奪（さんだつ）」を計画したとする説も一時注目されたが、近年の研究では義満は北朝天皇の後見役として朝廷を支えた実態が分かっている。4代義持以降も公私にわたり、天皇を補佐し続けていた。

・現在の京都御所は北朝天皇の内裏（皇居）として使用された。将軍の住まい「花の御所」も近くに設けられ、幕府には天皇と将軍の親密な関係を演出し、権威を高める狙いがあったとみられる。

幕府と協調して政治

鎌倉幕府が1333年に滅んだ後、後醍醐天皇が行った急進的な「建武の新政」は武士の反発を招き、室町幕府を開いた足利尊氏は京都に新帝（光明天皇）を擁立する。吉野（奈良県）に逃れた後醍醐天皇は南朝を開き、約60年間続く「一天両帝」の南北朝時代が幕を開けた。

「北朝の天皇は幕府の傀儡」。そう評価されることが多い。戦前の歴史論争では南朝が正統とされ、尊氏は南朝に背く逆賊と断罪された。戦後は幕府や尊氏の再評価が進むが、一方で北朝天皇は幕府に権限を奪われた存在だとする考え方が主流になった。

北朝関連年表

1333年	鎌倉幕府滅亡。後醍醐天皇による新政開始
1336年	光明天皇即位。後に後醍醐天皇が南朝を開き、南北朝分裂
1350年	観応の擾乱勃発
1351年	尊氏が一時的に南朝に下る
1392年	南北朝合一
1467年	応仁の乱勃発

1990年代には3代将軍義満が天皇の地位をも奪おうとしたとされる「王権簒奪計画」説が注目された。その是非も含め、天皇と幕府の関係を巡る議論が活発化し、近年は北朝独自の訴訟・官僚制度など、多様な論点が示されている。その結果、必ずしも「傀儡」とは言えない北朝天皇の実像が見えてきた。

「幕府は北朝の権威を必要とする一方、北朝も幕府の力に頼った。幕府初期、両者による協調政治が実施されたことは間違いない」と、中部大の水野智之教授（日本中世史）は指摘する。幕府初期は初代将軍尊氏と弟の直義（ただよし）による「二頭政治」が続いた。政務を担った直義は北朝の光厳上皇と関係が良好で、武士による荘園の侵奪を禁じるなど両者は協調して「徳政」を実施した。

事態が変わったのは1350年。足利兄弟の対立に端を発した「観応（かんのう）の擾乱（じょうらん）」だ。直義への対抗のため、尊氏は一時的とはいえ、南朝に降伏。直義の死後、幕府は北朝に改めて後光厳天皇を擁立したが、皇位の象徴である「三種の神器」が南朝に渡っており、北朝の権威は大いに低下した。

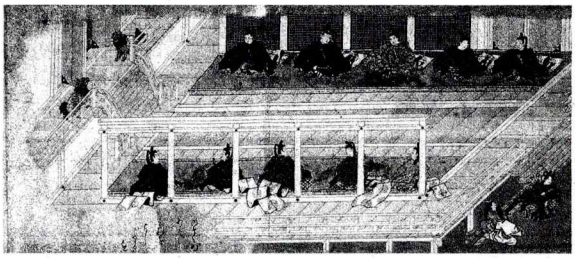
「北朝天皇家を担ぎ出すことで自らの存在を正当化してきた幕府にとって、北朝の求心力回復は喫緊の課題だった」と、聖心女子大の石原比伊呂准教授（同）は指摘する。尊氏の跡を継いだ2代義詮（よしあきら）が取り組んだ。

3代義満の時代に三種の神器が北朝に戻り、1392年に南北朝が合一した。義満が合一前の北朝の後円融天皇を冷遇したことが、「王権簒奪計画」説の根拠とされたが、石原准教授によると、両者の不和は個人的な側面が強く、合一時の後小松天皇と義満は良好な関係を保った。出家後に「法皇」として振る舞って権力を維持したのも天皇の後見役を務める意図があったという。

4代義持は後小松天皇の臣下であるとの姿勢をさらに明確にした。「『王家』の執事」として皇室儀礼の監督から朝廷内の女性問題など「スキャンダル」対応にまで奔走。「将軍家が北朝天皇家を公私にわたって丸抱えするというあり方が室町期の天皇家―将軍家の基本構造として定着した」と石原准教授は指摘する。

北朝天皇の系図（□は天皇以外）

光厳―崇光―□―□―後花園
光明―後光厳―後円融―後小松―称光



「北朝の後光厳天皇の即位（太平記絵巻　巻第十　第4紙より）」＝部分。埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵

南北朝合一時の取り決めでは、北朝系と南朝系で交互に皇位継承を行うとされたが、義満は再興を目指す南朝の皇位回復の可能性を摘み、以降の皇統は北朝系の天皇が担うこととなる。

一方、北朝内でも皇統を巡る対立が続いた。観応の擾乱の余波で、南朝に拉致された北朝の崇光上皇は帰京後、自身の子の皇位継承を望んだが、後光厳の子である後円融が天皇に即位して目的を果たせず、以降、「崇光流」と「後光厳流」の対立が続くことになる。

幕府が支持した後光厳流の天皇は後円融から後小松に継承されるが、後小松は後に上皇となり、1428年に崇光流の皇子を後花園天皇として即位させた。この出来事は従来あまり注目されてこなかったが、水野教授は「南北朝期から続いた皇統分裂に終止符が打たれた重要な画期だ。現代に至る天皇家の歴史を知る上でも、北朝の理解は欠かせない」と指摘する。

近年は「北朝」を冠する一般書の刊行が相次いでいる。その存在感と歴史的重要性に注目が集まることが期待される。

（多可政史）

研究成果を反映
掲載の予定です。

参考文献　遠藤珠紀・水野智之編・日本史史料研究会監修『北朝天皇研究の最前線』（山川出版社）、石原比伊呂『北朝の天皇』（中公新書）、今谷明『室町の王権』（同）、佐藤進一『日本の歴史9　南北朝の動乱』（中公文庫）